

第2回東名遺跡保存活用計画策定委員会 議事録

1 開 会

2 あいさつ

3 委員長あいさつ

4 議 事

《報告事項》

・第1回策定委員会での主な意見とその対応について

【資料を基に説明】

【質疑応答】 ●…委員 ○…事務局 ■…オブザーバー（国交省）

- ：先ほどセンターの場所は佐賀市北部の山麓文化エリアにということであったが、未だ具体的な場所は決まっていないと考えてよろしいか。
- ：埋蔵文化財センターの基本計画にも明記していないし、内部的にもどこにとは未だ決定していない。
- ：センターの基本計画をみると、展示の6割が東名遺跡の資料となって、全体に占める割合が高い。このセンターで東名遺跡のガイダンス機能を済ませようとしているのかということをおうかがいたい。
- ：それは、埋蔵文化財センターの場所がどこになるかによると思う。東名遺跡のそばであれば、ガイダンスを兼ねてという形になると思うが、離れた場所になれば、東名遺跡のガイダンスは何らかの形で遺跡のそばに整備をしなければならないと思う。
- ：センターが東名遺跡以外にできた場合に、東名遺跡の資料の6割近くがここに入るという構想はゆるぎないものなのか。
- ：センターの建設場所がどこであれ、東名遺跡の資料が展示の6割かどうかはわからないが、かなりの部分を占めてくる可能性はある。編みかご等が将来的に重要文化財となる可能性があり、重要遺物の保管ということも含めて、この埋蔵文化財センターの計画をつくっている。展示の6割を占めるかどうかは今のところはっきりとは言えない。
- ：埋蔵文化財センターが東名遺跡の近くに建つ可能性もあると考えていいか。
- ：今のところ、どこにということとは決まっていないし、東名遺跡周辺は候補地の一つになっている。
- ：先週現地を見せていただいて、そこに隣接している資料が保管されている場所や、ダイナミック展示のメインになるものも同時にらせていただいた。東名遺跡を保存して活用していくという、この委員会へのミッションのことを考えても、現地に近い場所に実際の展示物が見られる施設があるかないかというのは、今後、遺跡を活用するという面

で非常に重要になってくると思う。先ほど言われたとおり、全体の 6 割を占める展示が現地の近くに隣接してあるのか、それともかなり遠くまでいかないと本物が見られないのかというのは、大きな違いとなって表れてくると思うので、慎重に考えた方がいいと思う。どこに設置するかというのは大きな問題で、埋蔵文化財センターの基本計画に示されている展示の内容、構成を保ちたいというのであれば、東名遺跡に隣接するところに建ってしかるべきなのではないかという印象をもった。

- ：次回からこの委員会で活用の問題というものを議論することになっているが、その際にどのような形で、どのような素材を活用していけばいいのかということが具体的に出てくる。次回 11 月の委員会の時にセンターをどこに置くかというのは決まっているのか。そうでないと具体的な活用案というのは非常に出しにくい。スケジュール的にはいかがか。
- ：できるだけ早く決めたいと思っているが、色々な問題が絡んでおり、おそらく 11 月中には決まらないのではないかと思います。埋蔵文化財センターについては、次のステップが基本設計になるが、設計に入る折には場所が決まっていなくて難しいので、できれば今年度中に決めたいと考えている。11 月中はかなり厳しいと思う。この委員会の仕切りが難しくなるかもしれないが、センターがどこにあるかというのは置いておいて、本来どうあるべきか、ということの議論をしていただければと思う。もちろん、決まれば皆さんにお知らせをして、この会に反映できるようにと思っている。
- ：舞台が決まらないと、役者がどれ位揃うか、どういった演技をすればいいかというのはなかなか決まり難いというか、まさに不毛になってしまう。またゼロから仕切り直しということになってしまうので、今日の本質的な議題ではないが、ご考慮いただいて、スケジュール的に無理がなければ 12 月の後半位に委員会を開く。そのようにしていただければ、私どもの労力が無駄にならないと思う。
- ：センターの場所がいつ頃決まりそうなのかということも考慮しながら、スケジュールを調整させていただきたい。ご迷惑にならないようにできるだけしたいと思う。
- ：今、センターの設置場所の問題が出て、今年度中に場所を決めたいという答弁であるが、私達は東名遺跡が国史跡指定になって本当に喜んでいる。苦節 10 年ばかり。東名縄文館には延べ約 9 年間で、2 万人位の方が見学に訪れていただいている。昨年は指定になったので、年間 3,500 人位であったが、やはり認知度が低く、私達の PR 不足かと思う。案内板等もないので、全国から歴史ファンの方が来られても場所がわからない。タクシーで来られても、レンタカー等で来られても、タクシーの運転手も知らないということで、色々ときまづい思いもして、そのたびにお詫びをしているところである。私達の団体は、国史跡に指定されるまでの 9 年間、地道に真摯に愚直にがんばってきた。それは市当局の職員のご努力と、国交省のご理解もあったことであろうと思っている。5m 掘削されなければ、奇跡の発見はなかった。遺物がまたすばらしく、日本最古の最大規模の湿地性貝塚ということで、来られた方には胸を張ってお話をしているところである。

そうすることで、我々の団体全員の気持ちは、これだけ貴重な遺跡をどういう方向に将来展開して貰ってもらえるのか、どういう方向になっていくのだろうかと思っている。私達は年齢的にあまり先がないが、後世に残し、ボランティア活動も後輩に譲っていくためにも、この遺跡を佐賀レベルで止めるのか、全国レベルまでいくのか、青森県の三内丸山遺跡と同様、世界遺産にももっていけるような遺跡ではないだろうかと思っている。こういう気持ちは、私達のメンバー全員が持っている。

私達はやはりきちんとした展示館を遺跡のそばにつくっていただいて、臨場感あふれる、少し行けば遺跡に到達するので、ボランティアガイドも質を高めたいと思っている。そのために色々な運動を行っていて、8月4日には市長に要望書と署名活動の名簿等も提出したところである。私達の真摯なまじめな気持ちもご理解していただきたい。5月だったか、NHKでも展示館、資料館、博物館、これが非常にピンチであると報道していた。静岡県の浜松や北九州は成功している。特に北九州は成功しているというような報道をしていた。その鍵はボランティア活動、その活動次第で動くのだということも報道された。私達もなるほどと思い、この程度のボランティア活動ではいけない、8,000年前の縄文人達にしかられないようにがんばって、吉野ヶ里遺跡は日本レベルだが、東名遺跡は世界レベルにももっていければというのが私達の念願である。少し大きなこと申し上げたが、委員の皆さんにご理解いただいて、私達の気持ちを少しでも汲んでいただければと思っている。

- ：センターの設置については、私達の議論の中でも不可欠な要素でもあるし、やはり史跡、遺物、そして活動というのが三位一体と私は考えているので、この決定に関しては、是非、東名遺跡の隣接地でお願いしたい。
- ：センター以外に、ガイダンスを別に設けても、同じような展示を違った場所に2つするのはなかなか難しいと思う。例えばセンターの場所が東名以外の場所になれば、遺跡近くのガイダンスは、体験館みたいな要素を大きく入れるとか、そういう形で内容が随分変わってくると思う。それによって保存は変られないにしても、第3回、4回の委員会における活用整備、運営体制が随分変わってくる。センターの位置がある程度決まらなければ、次の段階へ話を進めるのは非常に難しくなってくるかと思う。ただ、2案位つくられるということであれば、またそういうのもありかとは思いますが、非常に難しい。
- ：センターの場所の問題について、委員長は進行に戸惑っているのではないかと思う。この問題は前回も少し議論されたと思うが、要は東名の活用を考えていく上でガイダンス施設をぜひということと、この際、念願の埋文センターをつくりたいということが交錯状態にあるのだろうと思う。それで、事務局の方からはっきり言えない部分もおありなのだろう。埋文センターとなると、収蔵施設とか、色々な施設が必要になってくるので、それなりのスペースが必要になってくる。東名遺跡のガイダンス施設ということになれば、それに集中した施設、体験学習とか、そのようなものの場も必要で、できるだけ隣接することが望ましい。この会議の目的は、あくまで東名遺跡の保存活用を考えて

いく、その上で埋文センターができるのなら、ガイダンス施設的に展示がより充実した形でできるようにという考え方で望むしかないのだろう。そこで、土地の問題なのでお話になりにくい部分があるのだろうと思うが、全く真白なのか、多少どうにかなるのかということで、かなり話は違ってくるのではないかと思う。例えば少し無謀だが、この委員会で埋文センターが遠いところになるのなら、ガイダンス施設としては意味がないので、近くで、埋文センターの分室、東名展示館ということでも構わないが、少し余裕をもたせた形の考え方をこの委員会から物申すということがあってもいいのではないかと思っている。

- ：私の立場から言わせていただくと、別にガイダンス施設を準備するという事になっても、東名遺跡の遺物がセンターの方に全部いってしまっ、名優は全部あつちに抜かれて、しかも予算を削られて、何か良い映画をつくれとか、いい舞台をつくれとか言われても難しい。先ほどの話では、センターに東名遺跡の遺物がいかないといけないということだが、遺物が東名遺跡の近くにないと、東名遺跡は死に体だ。せつかく全国に先駆けて、池の底に残っている遺跡を史跡として残そうとした文化庁の意思もすばらしいが、そのガイダンス施設にいても、どこかに取られた後の残りしかないということであれば、全く魅力のない、特に一般の方にはわかりにくい遺跡になってしまう。そこを懸念するので、センターの場所がどこになっても、この委員会としては、遺物は東名遺跡の近くに良いものは全部もってきていただきたい。そして、ガイダンス施設をつくらせていただきたい。これはお願いだが、今からセンターの場所が決まっていく中で、そういった議論も出てくると思うので、東名遺跡の良い遺物は、どういう形であろうと東名側に持ってきていただきたい。
- ：国史跡指定は池の中に貝塚が4カ所、指定面積は18,000㎡くらい。そして出土遺物も重要文化財になっていくような話も聞いているが、それはいつ頃になるのか。重要文化財になる遺物は何点位になるのか。
- ：重要文化財の指定に関しては、ランク付けはあるとは思いますが、少し時間がかかるように聞いている。具体的にそれをきちんと収蔵し展示できる場所が決まらなと指定できない。そういったところがあるので、時間がかかるのではないだろうかと思うし、点数に関しても今折衝中で、公にしにくい部分がある。貴重な遺物はできるだけ指定する方向で進めていると聞いている。
- ：私達は将来性を見込んで、保存と活用のバランスを取ってもらいたいと思っている。
- ：要望としては、センターがどうであれ、東名遺跡の遺物というのは遺跡の周辺に展示をしていただきたい。収蔵していただきたい。そこだけ確認しておきたいと思う。

《協議事項》

(1) 史跡周辺の環境について

【資料を基に説明】

【質疑応答】 ●…委員 ○…事務局 ■…オブザーバー（国交省）

- ：縄文海進という言葉があたり前のように使われるわけだが、この地域の陸層の変遷みたいなものをまとめられているものがない。巨勢川調整池で色々観測されているようだし、環境ということなので、そういう研究もどこかでしていただければと思う。
- ：遺跡周辺のボーリングデータみたいなものは何かあるのか。例えば数万年前からの環境変遷がわかるような土壌は、分析されていないか、残っているのか。
- ：調整池を掘削する前のボーリングのデータは残っている。
- ：洪積層まで達しているようなデータなのか。
- ：調整池の中だけは阿蘇 4 までいっている。調査報告書には掲載した地層の基準について、現地でも阿蘇 4 の二次堆積層は露出していたので、そこまでは記述している。
- ：先ほどの説明で樹立は東名遺跡がスタートだということが、それ以前というのはまだ海退しているし、図で示されている後の例えば平安時代とかの海岸線はどうなのか。資料の 9 ページの海岸線、弥生も古墳も同じようなラインで、これが何の根拠に基づくものなのか。それ以降になるとかなり干拓とかされていると思うが、そういった史実というか、そういったデータと交えて、古い頃から現代にいたるまでのものは何かわかっているのか、わかっているのに表現できないのか。
- ：記述していないが、弥生、古墳時代の海岸線のラインは想定である。縄文海進のピークのラインは九州大学の下山先生が公表されており、それを参考に、時代毎に遺跡の分布が広がってくるので、それを考慮して想定している。それ以降については、室町時代以降に干拓が進むが、それについては大体復元ができる。干拓が始まるラインが古代の海岸線と大きくは変わらないのではないと思われるので、大雑把な流れで、干拓まで入れて現代までの変化は表現できると思う。埋蔵文化財センターの展示についても、通史展示で、平野の広がり、それに伴う遺跡の展開というのが佐賀の特長だから、現代まで含めて、平野が広がりながら遺跡が展開していくというのを紹介しようと考えていた。
- ：これは東名遺跡を軸にすればそれでいいが、史実的にはもっと古い時代に、ここが干上がっているような状態がある。そういう環境史の中で東名遺跡を位置づけられないのかという気がする。
- ：干潟の形成というのが、浮泥が潮汐作用によって堆積して行って広がっていく。少しずつ泥が溜まりながら干潟が広がっているというのが、東名遺跡の調査データで読み取れる。
- ：海が来たということは、その前までは引いている。例えばもっと洪積世の場合は侵食が進んでいるので、地形というのは海側が落ちていたのが、だんだん浮泥が堆積して平坦になっていったということであれば、その前史のところも少しデータがあるかどうか

わからないが表現されて、海が来たということにもっとインパクトが出せるのではない
か。洪積世まで入れろというのは無理かもしれないが。

- ：あまりそういうデータはない。
- ：山間部はあるが、平野部はそういうデータはない。
- ：有明海の洪積世の深さとかわからないのか。
- ：地盤がどういふふうになっているのかということは、ボーリングデータがあったり
するのでわかりはする。
- ：13 ページに断面図があるが、これではなだらかに海が下がっているが、通常、基底は
埋没段丘があつて、階段状の構造をしているが、それはどこまでつかめているのか。具
体的な場所として、遺跡の近くには出てこない。ボーリングで調べると、どこも沖積平
野の下は埋没段丘であり、沖積層の下に沈んでいる。あまりそういうデータがないので、
その辺がどうまとめられるのか。それを目的に直線的にボーリングを入れて、基盤の目
の中に組んでやっていたらあるだろうが。
- ：データがあればということで、わかればという程度にしておきたいと思う。あまりこ
だわるところではないので。
- ：5 ページの図 2-7 だが、東名遺跡のまわりを囲んでいるのが縄文海進期の海岸線のライ
ンだと思うが、この図の中で、例えば北部であるとか、南部の方の海岸沿いに、同じよ
うなラインが引けるところがあるのであれば、引いた方がいいと思う。そのあたりはわ
かっているのか。
- ：福岡平野も熊本の方も、調べられる範囲で入れたいと思う。掲載されている書籍とい
うか、そういうものから引っ張ってくるような形になる。
- ：同じような色のマークがついたところとピンクのマークが、どういふふうに関連があ
るのかわからないのが気になったので。

(2) 史跡の概要について

【資料を基に説明】

【質疑応答】 ●…委員 ○…事務局 ■…オブザーバー（国交省）

- ：現在調査中とか、分析されている成果については、最終的に報告書が出るのか。
- ：現在も、文化庁の補助金をいただいて整理作業を継続しているので、最終的にその成
果として報告書をつくる。この遺跡についてはたくさんの遺物があつて、今までの報告
書では全ての掲載はできていない。できれば一覧表、写真だけでも掲載した目録的なも
の、例えば骨角器編とか、貝製品編とか、どの位のものがあるというのを示すようなも
のはまとめたいと思っている。今後、重要文化財指定の可能性もあり、そういった取り
扱いの時に基準にできるようなものを作成しようと思っている。そこに現在継続中の分
析も掲載できる。
- ：それは何年度まで続く事業か。

- ：予定では平成 32 年度。
- ：そういった新たな成果を公開していく時に、活用できる予算はあるのか。補助金をもらっているのは整理予算だけなのか。
- ：整理作業を続けさせている予算は埋蔵文化財調査の補助金。公開活用の補助金は別立てでいただいている。27 ページの図 3-29、右側のその他の下の方に公開活用事業とある。平成 24 年度から活用の補助金をいただいて、具体的な活動をしている。
- ：これは毎年続けていく予定か。
- ：続けていく予定である。
- ：本命の話ではないが、28、29 ページの研究成果一覧を見て思った。最後のところに応用地質の保存対策というのがあるが、ここの出土遺物については、すばらしい保存処理がなされてきているという具合に私はみていた。最近、我々保存屋の分野でいうと、あまり先生方の保存科学の研究が行われなくて、むしろ民間企業の方がよほどがんばって新しい方法を開発して努力されている。これから多分目玉になるであろう 3D の剥ぎ取りというのものも、努力の成果の一つなのであろう。そうすると、そういうものも評価していかないといけないのかという具合に思った。報告書の中には業者からの報告はあったりするのか。もしあれば、そのまま利用すればいいのだが、無いにしても、民間の皆さんのものすごい努力でここまでできている。点数も多いが、処理が高度で良くできているものだと思う。それは既成の研究者の成果というよりは、民間の皆さんの努力の方が大きいと思うので、その辺を少し、どこかで出せば良いと思う。
- ：只今のご意見は保存処理に関する技術的な経験値というか、そういったものも、こういったレポートの中に入れる。民間というレベルを超えて一つの技術であるし、今後継承なり乗り越えていく基礎材料ともなるので、報告書にもどうやってカゴを残したのか、どういうところに苦労があったのか、技術的な革新があったのかという部分を載せられると、総括的な意味で役に立つものになると思う。
- ：出土遺物の処理については、そのほとんどを民間委託で行っている。特徴的なのは、土つきの編みカゴの処理だと思う。それらは吉田生物研究所に高級アルコール法でお願いしていて、あれだけの数の保存処理をしたところはないと思うので、吉田生物に研究成果をまとめてみてはという形でお願いしてみようと思う。もう一つ言われていた剥ぎ取りについてはスタジオ三十三という業者にやってもらっているが、そのことを調査報告書の東名遺跡群Ⅱの第 6 分冊に数ページ書いてもらっている。それは項目立てができなくて、ここには掲載していなかったが、そういうものもここに載せておきたいと思う。
- ：20 ページから 39 ページまでに掲載されている図表が、本文に反映されていないものがあった。19 ページまでは本文の中に図表番号が入って対応ができているが、それが 20 ページ以降入っていないところが多くみられたので、入れていただきたい。また、27 ページの表だが、これに表番号が付いていなかったのので、こちらも付けていただくといいと思う。第 3 章の内容については、過不足なく述べていたので良いかと思った。

- ：別の委員会では計画書を出す前に、委員の先生達に総チェックをしていただくような機会と時間があったが、そういうことを事務局の方で考えていないか。つまり先ほどのような全体を通した時の、報告書としての体裁の部分でも複数の目で見られた方がいいと思うので、機会があれば最後の委員会の時にでも総チェックする時間を作っていたらと思う。
- ：基本的に事前に送付して、1度目を通していただいて、委員会で意見を出していただいてという形にはしている。今回はお送りするのが遅くなってしまったが。
- ：そうではなくて、最終的に印刷物にする前の確認という意味で、委員会の意見を反映しているものなので、最終的に皆さんに目を通していただいた方が良い。先ほどのような、読み物としての体裁部分にも配慮していただいて読んでいただければ、印刷校正にも役に立つので、そういったステップを踏んでいただければと思う。

(3) 史跡の価値について

【資料を基に説明】

【質疑応答】 ●…委員 ○…事務局 ■…オブザーバー（国交省）

- ：冒頭の方に国内最古とか、最大級とかあるが、世界でも最古で最大級であり、日本だけの価値ではないというところをもう少し強調できないか。世界的には新石器時代の後半期が中心。関東の貝塚なども全部後半期で、大体 6,000 年前以降の遺跡ばかりである。それよりも古く、海水準が上がりきる前の遺跡というのは非常に珍しい。その様相がわかる遺跡として非常に価値がある。前半期の遺跡としては、日本だけでなく東シナ海の沿岸に、中国では有名な河姆渡（かぼと）遺跡が 6,000 年から 7,000 年前である。それに連なる遺跡もあり、そこからも編組製品が出ているし、貯蔵穴もあるという形。近年では貝塚もみついている。東名遺跡は日本の中だけというより、暖温帯域というか、東アジアの中での一つの文化の様相として非常に貴重な遺跡になってくると思う。その辺をもう少し強調するような形がいいのではないだろうか。日本の中だけでおさまるような遺跡ではない。
- ：その点については、(2) の最後のところに、西日本に限らず、日本を代表する縄文遺跡というような記述があるが、これまでの縄文文化はどうしても東日本中心に語られてきたが、縄文文化とは一体何なのかということを見直す上でも、この遺跡の価値づけができると思う。その評価は暖温帯域の中国の南部とか、そういったところにつながっていくようなものかもしれないし、東アジアの中での位置づけ、今までの縄文文化に関する一辺倒の考え方の中に、もう少し違う認識というか、文化観というものを抱かせるような価値ももっていると思う。
- ：国内最古最大級の部分について、先生方のお墨つきをいただけるのであれば、そういった記述に変えたいと思う。また日本だけに止まらず、東アジアを含めたところでの価値づけを、先生方に色々聞きながら書き加えていきたいと思う。

- ：L型擁壁という言い方でご説明されてきているわけだが、説明板をつけるために壁を建てたのだろう。その壁に説明板というよりもっと面白くしようと思えば、剥ぎ取りの断面、そのまま貼るわけにはいかないが、そのようなものをもってくることもできるだろう。要するにL型擁壁というのは何だということになる。本来どういう目的で、これからどうしようとしているのか説明していただきたい。
- ：国交省に費用も含め、保存対策のためのキャッピングの工事をしていただいているが、もともとL型擁壁には、説明板をつける、実は保存貝塚の部分も国交省の方で、屋外に展示しても劣化しにくい方法で貝層の剥ぎ取りをつくられているものがあるが、それを付けて貝塚の解説をするための土台で置かれたもの。他は砂利敷きで貝塚範囲の表現をしている。結局、その計画がL型擁壁を設置したところで止まっている。その続きは現実的には国交省の方ではやらないということで、整備の段階でそれをどう活用して、どういう風な表現をするのかとか、砂利敷きについてはどうするのかといった問題が出てくるので、この諸要素の中に入れてさせていただいた。結局、最初の計画で予定されていたものは完成してなくて、中途半端で止まった状態になっているので、それをどう活用、または簡易的に取ってやり直せるのであったら、撤去するのかというところになってくる。
- ：L型擁壁ではあまり価値ある構成要素にはなりにくいので、何か説明板用とか、そういうことを考えておられるだろうし、この委員会でも、これの活用の仕方はいずれ検討することになると思う。せつかく使えるような貝層の剥ぎ取りがあるのなら、それを活用することなどが出てくると思うので、そういうことを想定した上での名前にした方がいいと思った。
- ：L型擁壁という構造物名だが、もともと巨勢川調整池では、水位が5m位上がるような計画があつて上がったり下がったりするため、堅固なものでないといけないということで、説明板を設置できるようなコンクリートの構造物を保存対策の時に一緒におかせていただいている。今後の利活用の中でそのコンクリート壁自体があまりにも異物で、利用できないということになれば、表面だけはカッターで切って撤去ということも対応可能だと考えている。何かしら説明板などを設置するというのであれば、今ある擁壁を利用していただきたい。
- ：遺跡表示施設とか、そのような名前に変えては。
- ：今後活用する場合に、使用できるような名前にした方がいい。
- ：L型を取るだけでも。単に擁壁だけでも良いのでは。
- ：この擁壁は保護の役目は果たしているのか。遺跡の土留めとか。
- ：保存は基本的にキャッピングで行っている。その上に置いているような形なので、特に保護の意味は無い。
- ：説明表示施設とかにすれば良いと思う。
- ：縄文時代は非常に平和で争いのない、食べ物も豊富な時代で、弥生時代になると稲作

が始まるので、争いがおこり環濠集落をつくるような時代になっていく。東名遺跡では500～600年位暮らしていたようで、非常に平和な縄文時代、争いのない本当に豊かな、食べ物も豊富で、海の幸、山の幸もあったということを彷彿とさせるような整備が望まれる。そういった物語を説明板に解説していただきたい。色々な方法があると思うが、活用の仕方によっては外国から見学に訪れられる、その位価値のある遺跡だと思うので、英語とか、韓国語、中国語とか、そういった説明板も必要になってくると思う。

- ：今後の委員会において、具体的な整備の話も出てくると思うので、その時に再度ご意見いただければと思う。
- ：43ページの(3)周辺の環境を構成する諸要素の部分であるが、①史跡地周辺の景観という、この「景観」という言葉の中にどれ位の意味を込めるかだと思うが、目に見えるビジュアルなものだけを「景観」と呼ぶのであれば、それ以外にもいくつかの要素というのが出てくると思う。逆にその「景観」という言葉の中にいろいろな意味を込めていこうとするのであれば、この周辺の景観のもう一つ下のレベルのところには色々な各要素が入れられる、そういう構造になるのではないかと思った。遺跡の場所から言えることは、地形だとか、水門環境、つまりこの場所をうまく生かした土地利用や暮らし、生業というものがある、今の状態が脈々と少しずつ変化しながらつくられてきたというような意味、これもあると思うし、今管理しながら守っているという結果、生まれた生物の生息地、エコトープとしての価値であるとか、そういうこの史跡が守られることによって生じてきた付加価値というものも、色々ここに盛り込むことができるのではないかと思うので、書きぶりによって、いくらでも創出できる部分なのではないかと思う。
- ：今回、巨勢川調整池の環境については提示できていないが、その辺を少しまとめて、先生方にご相談しながら整理できたらと思う。
- ：史跡を残すことでのメリットというか、景観、生物、色々な面でそういったことを盛り込むことは非常に重要なことになってくると思うので、アドバイスをよろしくお願ひしたい。
- ：資料に佐賀市景観賞受賞ということが載せてあり、現在の巨勢川調整池の景観ということになると思うが、現在の景観と縄文時代の景観は随分違うのだが、その辺はどういう風に考えているのか。
- ：東名遺跡があった頃の地形というのは、その後の縄文海進による埋没によって完全に無くなっている。例えばここに調整池がつかられていなくて、遺跡が確認されていて史跡になった場合でも、おそらくまわりは全部平坦な水田になっていて、当時の景観はわからないと思う。当時の遺跡の景観は水辺が近くにあったと思うので、逆に調整池がつけられたことによって、水辺の空間となっている。その水辺の風景というのは、まわりが水田であるよりは東名遺跡があった頃の景観を彷彿、回帰させてくれると思っているので、調整池の景観をうまく利用した活用方法を考えていければと思っている。
- ：縄文時代というのは森の時代と言われている。東名遺跡も集落を含めて海際の比較的

近いところまで、かなりしっかりとした大きな森林状態だったと思われる。確かに調整池をみれば、アシ原などで海岸沿いの貝等が生育していたところがある。だが、その背後の丘陵地の部分を一体どういう風にするのか。それは無しで整備していくのか。

○：他の遺跡だと、史跡地内に当時の植生を復元した森などつくられているが、この遺跡は河川扱いの調整池の中にあり、森林の復元というのは難しいので、やるとしたら別の場所になる。調整池の中でも堤防上の部分とかになる。現在、調整池の北東角に縄文の森ということで、NPOの人と20本位当時の木を植えているが、改良土の関係で非常に育ちが悪く、もっと良い別の場所につくった方がいいと思っている。史跡地内での森林の整備は、水にも浸かるし、多分不可能なので、別の場所で植生の復元をして、そこで見ていただくような形にしかできないのではないかと思う。現状では、史跡地と一緒に当時の景観が存在するというのは難しい。

●：今後の検討において、遺跡を感じるという面も含めて、復元植生とか、体感できるような構造物、そういったものを活用面に入れて、縄文時代の景観をイメージしていただけるように努めていきたいと思う。

本質的価値の面に関して、気候変動というのが3番目にある。もう少し具体的に、どのような影響を及ぼしていたというところを書くことはできないのか。

○：最後に遺跡が廃絶されるのは、温暖化による海面上昇と温暖湿潤による気候悪化の土石流とか、そういったことで埋没していくと考えられる。また遺跡は500年から600年位続くが、途中の200年位は、これはまだ証明されていないが、寒冷化などの影響で貝塚が形成されていない時期があって、結局定住ができなくなっていることなどから環境変動の影響を受けているとか、最初の概要のところにある程度のことは書いている。

●：そのことについては了解した。もう一つ、干潟環境への適応という言葉がその下に出てくるが、先ほど最古、原点にするのはまずいみたいな言い方をしたのは、地形の変遷の中での問題であって、それは干潟環境とか、海洋適応とかという意味では、最古の遺跡で良いと思う。人類史的にみても漁具がほとんど出てこないが、海産物を採り始めている。そういった海洋というか、干潟環境ではなくて外洋に適応し始めるような姿もみえると思うので、少しグローバル化した文言でも良いのではないか。佐賀に閉じ込めるのではなくて、海洋適応とか、海洋資源適応とか、そういった環境に見事に適応しているというようなところを記述した方が良いと思う。そういったものはおそらく南の方の、先ほどの暖温帯域の話とつながってくるような文化的な特質だと思う。

○：文言を整理して加えてみたいと思う。

●：これは遺跡の本質的価値ではないが、付随する価値として、第1次調査をやられてもう20数年、それから貝塚がみつかって、調査を再開して12、3年が経っていると思うが、この間、資料の27～29ページに記載されているとおり、佐賀市の取り組まれた遺跡に対する調査、それを評価してもらおう委員会の形成、成果を公開していくという一連の流れ

は、非常にレベルの高い評価されても良いような活動だと思う。これに対しては敬意を表したいと思うが、そのベースになっているのは、特に 28、29 ページにあるような本当に緻密な、第一線でやられている先生方の分析をこれほど多様に、しかも質の高いものを多量にやられたという、これは大きな本遺跡の価値を裏づける科学的根拠となるものである。一般的に考古学の色々な場面をみると、低湿地遺跡とはいえ、これほど自然科学分析等を徹底してやったものというはおそらく稀有であり、国内でも非常に珍しい例だと思う。こういった価値を単なる学術的な研究に寄与するだけではなくて、きちんと評価しようということで「東名遺跡重要性検討会」を組織して、考古学者がきちんと人類史的、歴史的に考えた時に、どういう価値があるのかという価値づけをしていただく作業をやられた。これはおそらく非常に珍しい例だと思う。そして遺跡をきちんと保存するというのも、モニタリング委員会という委員会をつくって継続的にやられている。こういったことをトータルに考えると、遺跡に対する取り組み自体が、今後の低湿地遺跡調査のモデルになり得るような部分をもっている。これはなかなか手前味噌で出しにくいかもしれないが、今後の遺跡調査のあり方を考える上でも、一つの指針となり得るべき価値を持つものであるから、付加的価値というか、第 2 の価値みたいな形で計画書の方に載せていただきたい。

- ：各地で遺跡が掘られているが、これだけ組織的に色々な分野から検討した遺跡というのは非常に稀有だと思う。やっている遺跡もあるが、うまくまとめられていないものが多い。一つの遺跡をどういう風に調査し、整理し、研究し、そしてまた保存していくかという過程が非常に模式的に良くわかる事例であるので、そういう部分も成果に加えるべきだと思う。
- ：この辺もぜひ計画書の中に盛り込んでいただければと思う。
- ：千葉県に加曽利貝塚という有名な縄文時代の貝塚があつて、調査もかなり古く考古学的に指標になるような遺跡である。そこについては、史跡指定は古くから行われていたが、今年、特別史跡に指定された。それに伴い「保存活用計画書」を策定されていて、そこには本質的価値を構成する要素の中で、副次的要素として、加曽利貝塚をテーマとした研究及び研究資料というのも掲げられていた。そういった形で良ければ盛り込みたいと思う。
- ：諸要素の部分に戻るが、何人かの先生の発言の中に出てきたが、「水」というフレーズだが、これはやはり大きな要素なのだろうと思う。例えば 43 ページの表の中で、調整池があるが、こういうところで水とかあるいは周辺に池というのはないのか、貯水池みたいなものとか、あるいは低湿地の景観とか、ラムサールとか、その辺で「水」というのは構成要素の一つに入れておいても良いのではないかという気がした。
- ：そのとおりだと思う。「水」というテーマで検討して、構成要素として盛り込みたいと思う。

(4) その他

【質疑応答】 ●…委員 ○…事務局 ■…オブザーバー（国交省）

- ：次回以降、保存活用、整備に関して資料をつくっていくが、それにあたって、こういう点に注意した方が良いとか、こういうのも考えた方が良いというのがあったら、ぜひ参考にしたいので出していきたい。
- ：具体的には次回は、5章から9章分、そういったところが出てくるということか。最後までいってもいいが。
- ：価値づけに基づいた、具体的な将来像を文化庁の指針として、1つ大きいものを謳いなさいというところがある。そして、それに基づいた保存活用整備について話していくことになる。
- ：これまでの調査、研究というのが、非常に遺跡の価値を高めるベースになっているので、そういったものが継続的になされることが今後の活用においても遺跡の活性化においても非常に重要になってくるし、遺跡自体が保存されるのでなかなかできないが、可能な限り遺跡から色々なものを研究して発信していくような仕組みを、遺跡の活用という面でも基盤にしていきたいと思うし、そういった方策を練っていききたいと思う。将来的に持続するような遺跡に対する調査研究も考えていただきたいと思っている。
- ：そういった部分も盛り込んでいきたいと思う。